

クラークソン書簡始末

その三 クラークソン書簡その後

吉 田 真 紀

本稿は、クラークソン女史が一八八二年一月末に日本を離れてから一八八五年八月に日本帰任のためサンフランシスコを出発するまでの、書簡四九通、関係文書七通の計五六通の概要である。

日本帰任後の女史は京都伝道区で同志社女学校のために働き、一八八六年、同じく宣教師として同志社に教鞭をとるC・M・ケディ(Chauncey Marvin Cady)と結婚、夫妻で活動を続ける。従って「クラークソン(ケディ)書簡」は女史の日本帰任後も続いているが、神戸女学院史との直接の関わりはなくなるので、本稿をもって一応の区切りとする。

なお、書簡の宛先はおおむね伝道会本部のクラーク博士となっているので、その場合は、本稿では特に宛名を記していない。その他の人に宛てられたもの及び関係文書には、発信地のあとに宛先、差出人を記した。

第三五八号 一八八二年二月六日附 香港発。

○医師の指示により帰米が早まったこと。離日して、思ったより寂しい思いをしている。新年か春には日本に戻りた

い。帰米までの旅程と展望。英国での連絡先。

第三五九号 一八八二年三月十三日附 スエズ発。

○旅の経費について。ダッドレー女史と共に快適な旅を続けていること。二人とも、日本に戻るのが待ち遠しい。

第三六〇号 一八八二年四月三日附 ロンドン発。

○三月十三日附クラーク博士信受領。無事ロンドンに到着、健康状態も良好。今後の予定について。送金を期待。

第三六一号 一八八二年五月八日附 パーミンガム発。

○四月十二日附クラーク博士信受領、必要に先んじての資金手配に感謝。イギリスに来てから休養も十分に体調が良
いこと。神戸の吉田氏及びカーティス氏の手紙を同封。自分は（神戸の）学校のためにならないことをするつもりは
ない。日本に戻るかどうか、ご意見を待つ。日本での俸給について。神戸の生徒たちの写真と名前を同封。

第三六二号 一八八二年六月七日附 ウェイクフィールド発。

○六月三十日にグラスゴーからニューヨークに向け出発の予定。

第三六三号 一八八二年七月七日附 大西洋上。

○木曜の朝にはニューヨーク到着の予定。出迎えを希望。金曜の夜にはブルックラインに居たいと思う。

第三六四号 一八八二年七月二六日附 メリマック発。

○二十四日附クラーク博士信受領。ワード氏より、ジェンクス氏作成のリスト（クラークソン女史が日本に残してきた物
品の一覧の送付あり、これに基づき改めてそれらの処分・保管に関するリストを作成。自分の財政的な立場がはっ
きりしたので、計算書を同封する。ここしばらく体調が悪く医者にかかっている。

第三六五号 日附、発信地なし。

○クラークソン女史に関する計算書（第三六四号に同封されたものと思われる。）

第三六六号 一八八二年八月一日附 メリマック発。

○日本に残してきた物品についての問い合わせに返事を出したこと。当面の見通しについてヘウエルズレーのフリーマン女史に求職願を提出。医師の勧奨。希望する仕事。他のミッシェンの友人からの誘いについて。

第三六七号 一八八二年八月三日附 メリマック発。

○今回の帰米時の費用に誤算のあったことに気づく。将来の見通しが立たないまま伝道会の世話になりたくないこと。自分にとっては、休養よりも働くことを考える方が気が休まる。

第三六八号 一八八二年九月四日附 ブルックライン発。

○今夏の支出の明細を同封。当座の生活費として二五ドルを引き出したい。

第三六九号 日附、発信地なし。

○七月十三日から九月六日までの支出明細書（第三六八号に同封されたものと思われる。）

第三七〇号 一八八三年一月十一日附 ドーチェスター発。

○ウッド夫人の許に滞在中。自分の健康状態について。テイラー博士の治療を受けて、クリフトン・スプリングスに赴くよう勧められている。

第三七一号 一八八三年一月二十日附 ドーチェスター発。

○十八日附クラーク博士信受領。博士に会う方が良ければそのようにする。

第三七二号 一八八三年二月十五日附 クリフトン・スプリングス発。

○旅疲れがひどく、寝こんだこと。療養所でたいへん親切的看護やもてなしを受けていること。

第三七三号 一八八三年二月二十四日附 クリフトン・スプリングス発。ミーンズ博士宛。

○二月二十一日附ミーンズ博士信受領。友人らに相談してから確答したいが、新しい仕事よりも古い仕事にひかれること。神の導きに従おうと思うこと。

第三七四号 一八八三年三月六日附 クリフトン・スプリングス発。

○クラーク博士信受領。サンドウィッチ諸島の問題(第三七三号で言及されたミーンズ博士信の件か)について思案中。パッテン女史と共に働きたいこと。健康は回復しつつあると思うが、まだ安静を命じられている。

第三七五号 一八八三年三月二十二日附 クリフトン・スプリングス発。ミーンズ博士宛。

○身体不調のため返事が遅れたおわび。コハラ(ハワイ)に行ってもよいと思う。パッテン女史に同行してもらえないものか。このことは自分の意志で決めるのではなく、神の導きに従いたい。

第三七六号 一八八三年三月二十四日附 クリフトン・スプリングス発。

○今なすべきことを熟考中。ミーンズ博士宛の手紙を御一読の上、渡すべきか否か決めていただきたい。今朝届いたキャリー・ホワイト女史、カーティス氏の手紙を同封。どうしたらよいか意見を伺いたい。

番号なし 一八八三年二月十三日附 大阪発。クラークソン女史宛カーティス氏信。

○女史の日本帰任について、今のところ確言はできない。詳細は次便にて。(第三七六号に同封されたものと思われる。)

第三七八号 一八八三年三月二十七日附 クリフトン・スプリングス発。

○二十日附クラーク博士信受領。カーティス氏の言葉に希望を持っているわけではない。伝道会に頼らず独立したい。できればパッテン女史をコハラに伴いたい。

第三七九号 一八八三年五月三日附 クリフトン・スプリングス発。ミーンズ博士宛。

○ボストンに行く予定を変更、オルバニーでジャッド女史に会いコハラ行きについて話し合う。医師は、夏の間完全に休養すれば秋から何でもできると言っている。

第三八〇号 一八八三年五月二十八日附 ブルックライン発。ミーンズ博士宛。

○ボンド博士信同封の二十五日附ミーンズ博士信受領。九月以前に出発することが最善かつ必要ならそうしたい。同行者の問題へパッテン女史あるいはベックリー女史は如何へ。ボンド博士の手紙を読んで。

第三八一号 一八八三年五月二十四日附 ブルックライン発。ミーンズ博士宛。

○ボンド氏からの手紙を同封。この仕事の責任の重大さを感じ、引き受けるだけの自信がもてない。友人たちに相談したい。九月までに出発するのはよくないと思う。

第三八二号 一八八三年六月六日附 ドーチェスター発。ミーンズ博士宛。

○コハラ行きについての医師、アーノルド夫人その他知人たちの見解。

第三八三号 本部着 一八八三年六月十一日。ドーチェスター発。ミーンズ博士宛。

○カーティス氏信同封。日本帰任は待ちきれぬほどうれしい。コハラ行きがその道となるのであれば、そこに赴きたい。

第三八四号 一八八三年六月九日附 ドーチェスター発。ミーンズ博士宛。

○身のふり方を早く決めなければならないと思う。アーノルド夫人らのコハラ行きの勧め。自分としては日本での仕事を希望するが、神の御計画に従う。それともジェイ女史の方が適任と思われるか。海外伝道続行を希望。

第三八五号 一八八三年六月十九日附 ドーチェスター発。ミーンズ博士宛。

○ジェイ女史がコハラに赴任することになり、成果があがることを祈る。

第三八六号 一八八三年六月十二日附 ドーチェスター発。ミーンズ博士宛。

○パッテン女史の手紙を同封。自分のことについては神がすべてを決めて下さると信じ、心配していない。

第三八七号 一八八三年六月二十一日附 ドーチェスター発。ミーンズ博士宛。

○コハラでの仕事に関するボンド氏の手紙を、ジェイ女史の参考のために回送するつもりである。ジェイ女史の赴任について異存はない。自分に最もふさわしい道が開かれるのを待つ。

第三八八号 日附なし。ブルックライン発。

○クラーク博士の本国安着と健康の回復を喜ぶ。友人の家に招かれて滞在していること。カーティス氏帰米中であれば、郵便の宛先を知りたい。

第三八九号 一八八三年十二月十二日附 ブルックライン発。

○スミス・カレッジのシーリィ学長より仕事の照会あり。将来の準備として仕事につきたい。今のようなのんびりした生活は性に合わない。

第三九〇号 一八八三年十二月十八日附 ブルックライン発。

○シーリィ学長の求職者リストに加えられたこと。自分のあらゆる希望の最終目標は日本にある。自分の三つの課題〈経済的自立。家庭的独立。勉学のための時間と機会〉。

第三九一号 一八八四年二月二十八日附 ブルックライン発。

○先に受け取った手紙の内容について、クラーク博士に会って話したい。

第三九二号 一八八四年三月十日附 ブルックライン発。

○バロウズ女史とダッドレー女史に宛てた手紙が紛失したのではないか。

第三九三号 一八八四年八月五日附 ドーチェスター発。

○無為の生活が続けるのは好ましくない。神を信じて待ち望み忍耐に努めている。

第三九四号 一八八四年八月二十六日附 ドーチェスター発。

○クラーク博士に単独で面談を希望。

第三九五号 一八八四年九月五日附 ドーチェスター発。

○タルカット女史の来訪と二人でクラーク博士を訪ねるための段取りについて。

第三九六号 一八八四年十一月二十九日附 ボストン発。

○クラーク博士の出発前に、日本からの手紙について話がしたい。日本帰任に関する回状に寄せられたデイヴィス氏の反対意見について。主治医アモリー氏の見解。

第三九七号 木曜午前（本部着一八八四年十二月） ボストン発。

○デイヴィス博士からの京都赴任の提案を喜ぶ。伝道会に対する自分の負債の多さについて。京都行を望む六つの理由へ氣候。バームリー女史との協力。婦人宣教師の少ない土地で新島夫人を助けての婦人伝道の開拓。自分の将来のため。伝道団のため。秋に仕事につけることへ。

第三九八号 一八八五年二月二十八日附 ボストン発。ハーディ氏宛ウェッバー博士信。

○クラークソン女史の健康状態についてへ心音異常なし。過労には注意している様子。病気の徴候とみられるものは全くない。経験者として復帰できるであろうへ。

第三九九号 一八八五年三月十五日附 ボストン発。クラークソン女史宛アモリー氏信。

○心臓聴診の結果についてへ同年配の普通の女性よりも活躍できるであろうことへ。

第四〇〇号 一八八五年三月十六日附 ボストン発。クラーク博士宛ウェッバー博士信。

○クラークソン女史診察についてへ多少神経質な性格のようである。日本での過労その他からは既に回復しているもよう。いくぶん貧血気味だが器質的疾患の徴候はなし。爾後活動が続けていくことを妨げる理由は何も見出せない。

第四〇一号 一八八五年四月九日附 ポストン発。

○諮問委員会の決定を喜ぶ。これまでの困難な状況によく耐えられたと思う。クラーク博士の親身な配慮に感謝。健康には十分留意するつもりでいること。ウェッバー夫人、アモリー博士、婦人伝道会の人々の親切について。パーミンガムの友人たちからの、イギリス経由で日本に向かってはどうかとの誘いについて検討。

第四〇二号 一八八五年四月二十九日附 ポストン発。

○日本からの知らせを伝えるクラーク博士信受領。デイヴィス博士への返信について知らせる。グールディ女史とガードナー女史の帰米を残念に思う。タルカット女史の新任地について。

第四〇三号 一八八五年五月二十六日附 セントポール発。クラークソン女史宛フィー氏(北太平洋鉄道会社)信。

○ポストン・ポートルランド・サンフランシスコの旅費、諸経費、切符の手配に関する情報。

第四〇四号 一八八五年五月三十日附 ポストン発。

○北太平洋鉄道会社からの手紙を同封。タルカット女史とサンフランシスコでおちあい、八月中旬に日本に向かいたい。途中立ち寄りたいところ、今後の予定について。

第四〇五号 一八八五年六月十一日附 ブルックライン発。

○しばらく忙しくすごしていたが、日本に疲れを持ち越したくないので出発まで休養したい。新島氏より、九月に太平洋を渡るのは台風の危険ありとの意見。出発の時期を決めかねている。ご忠告を乞う。

第四〇六号 一八八五年七月一日附 ポストン発。

○当初ポストンを七月六日出発としたが日延べ。サンフランシスコ出帆は八月十五日の予定。ウェッバー博士のところで予防注射をしたこと。

第四〇七号 一八八五年七月十八日附 ブリックチャーチ発。

○いよいよ日本への途につく（現在までの旅程。車酔いのひどかったこと。フォスター夫人らの親切）。今後の旅程について、乗物酔いの体験と日本での使命などを考えると長旅はよくないと思われる。

第四〇八号 一八八五年七月二十五日附 トウインズバーグ発。

○パームリー女史の許に到着。北太平洋鉄道の旅は疲れるので、ユニオン・パシフィック鉄道を利用する予定。そのための切符、荷物の搬送の手配について、シカゴのハンフリー氏の不在が気がかり。これからの予定。

第四〇九号 一八八五年七月二十八日附 トウインズバーグ発。

○ハンフリー氏に手紙を出したが返事がないこと。荷物の搬送については一五〇ポンドまで無料の由、二五〇ポンドの荷のためワード氏の善処を乞う。これからの予定。

第四一〇号 一八八五年八月四日附 オマハ発。

○シカゴ滞在中楽しくすごしたこと。ハンフリー氏の親切。パームリー女史の現状。タルカット女史の身内に病人があり、オークランドでは女史の許に滞在できなくなったこと。

第四一一号 一八八五年八月八日附 オークランド発。

○無事に当地に着きタルカット女史、ペティー夫妻、グールディ女史に会ったこと。同行者ケール博士親娘とスワン夫妻について。出航が十八日に延びたこと。

第四一二号 一八八五年八月十八日附 オークランド発。(船上で記す。)

○午後二時、リオ・ジャネイロ号で出帆する。同行者の紹介。予約の不幸で良い船室がとれなかったこと。グール
ディ女史とタルカット女史が出航までの三日間を楽しませてくれたこと。船の写真を送る。

第四一三号 金曜夕。(一八八五年三月頃のものか。) 発信地なし。

○ウェッバー博士の見解では十月には日本で仕事についても差し支えない。アモリー氏には健康であると言われた。

デニー氏の診察も受けたが信用しがたい。日本では、長く疲れの多い伝道の旅で消耗していた。カーティス氏の所
見を送附。日本で疲れが出たことは当然であり、その原因がなくなっている今となつては日本に戻ってもよいと思
う。